

應造浮橋布施屋并置渡船事

一加増渡船十六艘

尾張美濃兩國堺墨俣河四艘二艘、○中略右河等崖岸廣遠不得造橋仍增件船略、○中

承和二年六月廿九日

「いほぬし」すのまたのわたりにて、あめにあひて、そのよやがてそこにとまりて侍にこまどもあ
またみゆ、

澤にすむこまほしからぬ道にいで、日ぐらし袖をぬらしつるかな

〔更科日記〕美濃の國なるさかひにすのまたといふわたりして野がみといふ所につきぬ、
〔玉海〕治承五年元年二月十一日戊子申刻藏人左少辨行隆來依疾不出客亭呼簾外○註略○謁之○中

略此間廻伊勢國舟可著須万多渡其後官軍可寄攻尾張國之由所聞也云々小時退出了、

〔承久軍物語〕さらば方々へぐはんぐんをさしつかはし、これをふせがるべしと○中○下てすのま
たへは、かはちのはんぐはんひですみ山田の二郎亥げたゞ一千よき○下

〔うた、ねの記〕道のほどめとまる所々おほかれどこ、はいづくともけぢかくとふべき
人もなければいづくの野も山もはるぐとゆくをとまりも亥らず人のゆくにまかせてゆめ
ぢをたどるやうにて、日數ふるまゝにさすがならぬひなのながちに、おとろへはつる身もわ
れかのこ、ちのみしてみのおはりのさかひにもなりぬずのまたとかや、ひろぐとおびたい
しき河ありゆき、のひとあつまりて舟をやすめずさしかへるほどいところせうかしがま
しくおそろしきまでの、しりあひたり、

〔なぐさめ草〕墨股河は、美濃尾張の境とかや、岸に打望たれば、船はむかひにあるほどにて、時うつ